

今本書内容ノ大要ヲ舉ゲンニ、本書ハ總論、各論ノ二編ヨリ成リ、第一編總論ヲ三章ニ分チ、人類ト戰闘ヨリ説キ起シテ、日本甲冑ノ起原、特色、甲冑ニ關スル儀式、年中行事等ニ至ルマデヲ詳述シ、第二編ヲ五章ニ分チ、小札、威毛、其ノ他甲冑ノ各構成材料ヨリ、鎧、兜、袖、小具足ニツキテ詳述セリ。第一編ノ三章中、前二章ニ於テハ、其ノ説ク所未ダ盡セリト云フベカラズ、尙研究ノ餘地アリト雖モ、後ノ一章タル各説及ビ第二編ノ各章ハ、著者ノ主トシテ研究セシ所ニシテ最モ詳密ヲ極メタリ。

之ヲ要スルニ、從來本邦甲冑ニ關シ、廣ク其ノ一切ノ事項ニツキテ詳述セルモノハ全クコレナカリシニ、著者ガ多年ノ努力ニヨリ、此クノ如ク組織的ニ記述セル大著ヲ完成セルハ、本邦甲冑ノ研究ニ一大貢獻ヲナセルモノニシテ、其ノ功績最モ顯著ナリトス。

醫學博士二木謙三君、醫學博士高木逸磨君、醫學博士谷口臈二君、
及ビ醫學博士大角眞八君ノ鼠咬症ノ研究ニ對スル授賞審査要旨

二木、高木、谷口、大角四君ハ、大正四年八月ヨリ十一月ニ亘リ、鼠咬症患者二例ニ就キテ研究シ、一種ノ「スピロヘータ」ヲ證明シ、患者ノ血液ヲ猿及ビ「モルモット」ニ注射シテ、接種ヲ第三代マデ繼續シ得タリ。而シテ同年十一月二十日、東京醫學會ニ於テ、石原、太田原、故田村三君ノ報告ト同時ニ、患者川上某ノ腋窩腺ヨリ得タル「スピロヘータ」ヲ供覽シテ、此即チ鼠咬症ノ病原體ナルベシトノ豫想ヲ報告セリ。當時發見セラレタル「スピロヘータ」ノ中等大ナルモノハ、九、〇乃至一〇、〇

「ミクロン」ニシテ、長型ナリシガ、後大正五年二月、四君ハ長登某ノ靜脈血ヲ「マウス」ニ注射シテ、接種「マウス」ノ血液中ニ短型ヲ證明シ得タリ。爾後大正五年五月マデノ間ニ、六例ノ鼠咬症患者ノ組織液又ハ血液ヲ動物ニ接種シ、「スピロヘータ」ヲ證明スルヲ得、該「スピロヘータ」ニ就テ詳細ナル記載ヲ發表セリ。

四君ハ「スピロヘータ」ノ純培養ニ成功シ、第四代マデ之ヲ繼續スルヲ得、且ツ長短二型ガ同一物ナルコトヲ證スルコトヲ得タリ。尙ホ四君ハ鼠咬症患者ニ就テ、疾患ノ初期中、「スピロヘータ」ハ咬傷局所並ニ局所ノ腫脹セル淋巴腺及ビ發疹部ニ存在シ、之ヨリ進ミテ徐々ニ血液中ニ侵入スルモノナリトセリ。

四君ハ動物試驗ニ於テ「スピロヘータ」ハ「サルヴアルサン」ノ注射ニヨリテ消失スルモ、注射後十四乃至十六日ヲ經テ再ビ血液中ニ現出スルコトヲ見、患者ニ於テモ同様ニ、十二名中再發四名三發一名ヲ經驗シタルコトヲ述ベタリ。

四君ハ初メ該「スピロヘータ」ヲ *Spirochaeta muris-morsus* ト命名シ、後、*Spirochaeta morsus-muris* ト改稱シ、而シテ之ヲ鼠咬症病原體ト斷定スベキ理由ヲ掲ゲタリ。其ノ主ナルモノ左ノ如シ。

一、本「スピロヘータ」ハ、鼠咬症患者四例ニ就テ、其ノ咬傷局所、皮膚發疹部、腫脹セル淋巴腺並ニ血液中ニ證明セラレ、他ノ病者、又ハ健康者ニ之ヲ見ズ。

二、本「スピロヘータ」ハ、鼠咬症患者ノ十三例中、九例ニ於テ之ヲ證明シ得、治癒後ニ全ク之ヲ認メズ、但再發時ニ再ビ之ヲ證明シ得タルモノアリ。

三、井戸、伊藤、和邇、奥田氏等ハ、本症患者血清ト家鼠ヨリ得タル「スピロヘータ」ノ間ニ溶解現象ヲ證明シタリ。之ニ次ギテ、四君ハ、患者血清ト患者ヨリ得タル「スピロヘータ」ノ間ニ溶解現象ヲ證明シ得タリ。

尙ホ四君ハ大正六年、鼠咬症及ビ其ノ病源「スピロヘータ」ニ就テト題シ、病原體及ビ病理解剖、症候論、診斷並ニ類症鑑別、豫防及ビ療法等ニ關シテ詳細ナル綜合的報告ヲナセリ。

之ヲ要スルニ、二木、高木、谷口、大角四君ノ研究ハ、極メテ有益ニシテ、鼠咬症病原體發見ノ上ニ多大ナル貢獻ヲ爲セルモノナリ。

醫學博士石原喜久太郎君、醫學博士太田原豊一君及ビ故田村幸

太郎君ノ鼠咬症ノ實驗的研究ニ對シ、石原、太田原兩君ニ授賞審

査要旨

石原、太田原兩君ハ、緒方正規博士ガ明治四十三年、初メテ報告セル實驗的鼠咬症ノ方法ニ基キ、大正四年春以來、實驗ヲ重ネ、大正四年十一月二十日ノ東京醫學會ニ於テ、二木、高木、谷口、大角四君ノ鼠咬症ノ研究ノ報告ト同時ニ、鼠咬症ニ關スル實驗的研究ノ結果ヲ發表シ、且ツ鍍銀法ニヨリテ、副腎中ニ存在セル一種ノ「スピロヘータ」ヲ見出シ、之ヲ供覽セリ。

次デ大正五年一月、石原外二君ハ、罹患セル「モルモット」ノ心臟血液、又ハ、腸間膜腺「エムルジオン」ヲ、健康ナル「モルモット」ニ注射シ、「スピロヘータ」ヲ血中ニ證明シ得タリ。又「マウス」及